

# ナラティブの前置き表現について

## ——「わたしのちょっと面白い話」の分析から——

豊田 早苗

### 1. はじめに

体験談を語るということは、日常的によく行われる言語活動である。失敗談を笑い話として披露したというような経験は誰もが持っているだろう。外国語学習者の言語運用能力を示す指標として広く用いられている CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) でも、B1 レベルで「自分の感情や反応を記述しながら、経験を詳細に述べることができる」、C2 レベルで「明瞭で滞りなく、詳しく、多くは記憶に残るような体験談ができる」という産出能力が要求されている。しかし、学習者が日本語で体験談を語るのは上級者でも容易ではないとされ(木田・小玉2001, 熊崎2006), 笑い話のつもりで披露しても笑ってもらえないことがあるという(加藤2003)。

日本語教育の現場において、体験談ナラティブの技術は指導されるべき事項のひとつであると言えるが、扱われる機会は少なく、何をどう指導すべきか明らかになっていない部分も多い。本研究では、体験談の構成要素のうち、前置き表現についてその特徴を分析し、日本語教育への応用を考察する。

### 2. ナラティブとは

#### 2.1 ナラティブの定義

Labov (1972) はナラティブを「時系列に沿って並べられた2つ以上の節から成り立っており、実際に起こったとされる出来事をそれが起きたのと同じ順序で言語化すること」と定義している。また身の周りに起こった面白い体験談を扱った木田・小玉(2001)は、ナラティブを「語り手自身に、実際に起こった、語るに値する、過去の出来事である」(p.33)と定義している。Maynard (1989) は会話中に差し込まれるナラティブについて、「主要部は、少なくとも1つの出来事に言及し、時間的に順序づけられた最低2つの行為を表すものでなければならない」(p.101)としている。

本稿では、これらを踏まえ、ナラティブを「時間的に異なる2つ以上の点から成り立っている話者自身の体験談」と定義する。

## 2.2 ナラティブの構造

Labov(1972)は、ナラティブの構成要素として「Abstract」「Orientation」「Complicating Action」「Evaluation」「Result or Resolution」「Coda」を挙げ、これらが一定の順序で現れるとした。Maynard(1989)は、Labov(1972)の他、これと類似した Longacre, Robert and Stephen Levinsohn(1978), Van Dijk(1980)を引用しながら、カジュアルなナラティブは以下の要素で構成されるとしている(pp.116-118)。

1. Prefacing (前置き)
2. Setting (場面設定)
3. Narrative Event (出来事の語り)
4. Resolution (結末)
5. Evaluation (評価)
6. Ending Remarks (終了表明)

Maynardは、これらの構成要素が必ずしも全て出現するわけではないが、PrefacingとNarrative Eventは必須要素であり、Settingも聞き手が知らない場合は必須であるとしている。

## 3. 先行研究

ナラティブの前置きについての研究としては、Maynard(1989)、李(1999)がある。Maynardは、Prefacing(前置き)とは、現在の談話からナラティブへの移行を示す表現であると定義し(p.117)、以下の7つのカテゴリーのうちどれか1つはナラティブ本体に入る前に必ず置かれなければならないと述べ、具体例を挙げている。また、「移行要求」以外は、ナラティブ本体のどの箇所にも出現し得るとしている。

1. Transitional claim (移行要求)  
ジャンル移動の発表。  
例:「そう言えば」
2. Evaluation/reportability (評価/報告価値)  
物語の価値を主張する。聞きがいのある話であることを主張する。  
例:「その話、すごいんだよ」

## 3. Specification of the source of the narrative (情報源の特定)

物語の源はどこに、又は誰にあるのかを述べる。

例：「でも、なんかさ、昔、司馬遼太郎の小説なんか、読んでたらさ」

## 4. Connection to immediate context of the listener (聞き手との関連付け)

聞き手にどんな関係があるかを述べる。

例：「昨日だよ、タキから電話がかかる前にオノダさんと喋ってて」

## 5. Overt confirmation of new information and/or request for permission (披露許可求め)

その物語を相手がまだ知らないことを確かめ、物語を披露してもいいか許可をとる。

例：「だから、あのう、語学研究所で、話、しなかったっけ？」

## 6. Title-like theme announcement (テーマ告知)

話のタイトルとも言えるようなテーマの発表をする。

例1：「ほれ、先輩の、要するに、話聞きに行ってるやつでしょ」

例2：「その、飲み、昨日、飲みに行ったでしょ」

例3：「ウエマツさんの鹿児島に初めて来たときの印象とかいうやつ」

## 7. Acceptance of theme suggested and solicited by the coparticipant (テーマ受け入れ)

聞き手から出されたテーマを受け入れた形の物語であることを伝える。

例：「ふうん、で、あ、あれ、アク、アクシデントも見たの？後の」

(Maynard (1989, p.101), メイナード (1993, pp.51-52), 例の原文はローマ字表記)

また、李 (1999) は、前置きの種類を以下のように分類している。

1. 話を変える表示をする
2. 話をするための許可を他の会話参加者に求める
3. 話をしようとする意欲を他の会話参加者にアピールする
4. 他の会話参加者の興味を引く
  - 4-1. 出来事の結末を先に言い出す
  - 4-2. 出来事発生当時の気持を表す
  - 4-3. 出来事から得た結論を提示する
  - 4-4. 物語の価値を主張する

李は、ナラティブは語り手と聞き手の共同行為として成立するものであり、これらの前置きによって聞き手は開始を承認してナラティブを支える役回りを引き受けるとし、このような言語表現を会話教育に導入すべきだと主張している。

Maynard (1989) の分類の 1, 5, 李 (1999) の分類の 1, 2, 3 は発話権取得が主たる目的であり、一方、Maynard の 2, 4, 6, 李の 4 は聞き手の関心を引くことを意図した前置きであると言えるだろう。

Maynard (1989), 李 (1999) の研究対象はいずれも雑談中に現れるナラティブであるが、本研究では発話権が与えられてから話し始めているものが中心である。よって発話権取得目的の前置きの必要性は低く、出現しにくいことが予想されるが、では話者は聞き手の関心を引き付けるためにはどのような前置きをしているのだろうか。5.2以降で考察する。

榊原 (2010) は Maynard (1989) の 7つのカテゴリーに基づき、テレビのトーク番組のナラティブの開始部を分析し、15話中12話 (80%) に前置きがあり、その内訳は「テーマ告知」5件、「聞き手との関連付け」1件、「テーマの受け入れ」が各1件ずつであったと報告している。また、7つのカテゴリーに含まれない前置きとして、「テーマの背景」が4件あったと述べ、これは経験や出来事自体が起こった場所や日時についてではないという点で setting (場面設定) とは異なるとして、以下のような例を挙げている。

「去年の末ぐらいに子どもが生まれまして、で、一人目なんですけど、ちょっとあの親父コンプレックスって言うんですかね、他のお父さんが立派に見えて僕なんか全然あかん、ていうような気持ちになるんですよ。」

この背景が語られた後、「これはたまには親父らしいとこ見せなあかん、嫁とかに、と思って、ある日嫁が…」と続き、テーマである「割れたグラス」の話に入っていくという。

榊原はこれらの分析に基づき、日本語教育への応用として指導項目の提案をしているが、文型や指示詞等に関するものが主であり、前置きで語るべき内容については詳述していない。

また、本研究で使用した「わたしのちょっと面白い話」の開始部を扱った研究として、三枝 (2018) があげられる。三枝は「わたしのちょっと面白い話」は、日本語教材でよく取り上げられる活動とは異なり、その話し方をみることで日本語教育で取り上げたらよい項目が示され得ると述べ、「わたしのちょっと面白い話」の談話55編の話し始めと話し終わりを分析している。但し、これは話し始めには日本語母語話者、学習者ともにフィラーが多い、母語話者は「んです」の使用が目立つなど、表現形式に着目したものであり、前置きの種類や具体的な内容には触れていない。

本研究では、前置きを Maynard (1989) の 7つのカテゴリーに「テーマの背景」を加えた 8種類に分類した上で、その内容及び言語形式について分析し、日本語教育への応用を検討する。

#### 4. 研究方法

データは「わたしのちょっと面白い話コンテスト」公式ウェブサイトで公開されているナラティブを用いた。

「わたしのちょっと面白い話コンテスト」は、参加者が日本語で語った3分程度の「面白い話」の動画をインターネット上で公開し、視聴者投票によって優秀作品を決めるもので、2010年から毎年度開催されている。これまでのエントリー作品はコーパスとして公式サイト上で公開されており、その数は2020年1月末時点で、日本語母語話者（以下、母語話者）による話248話、日本語学習者（以下、学習者）による話227話の計475話に上る。

「わたしのちょっと面白い話コンテスト」の代表者である定延は、「日本語学習者は日本語で「面白い話」をすることに概して積極的であるが、日本語での「面白い話」の仕方を教わっていないせいか、上級者でもさまざまな間違いを犯している。特に、日本語の流れを制御する談話技法を学習者にどのように教え、習得させるかを検討するための材料は、「面白い話」コーパスの随所に見つかる」（定延2016）と述べており、「面白い話」を分析することによって、ナラティブに必要とされるテクニックを提示し、より効果的な指導につなげることができると考えた。

話の内容は、母語話者のほとんどが話者自身または人から聞いた体験談であるのに対し、学習者にはいわゆる小噺やジョークもいくつか見受けられたが、本研究では「話し手が独話形式で語っている自身の体験談」のみを対象とした。<sup>1</sup>

これら母語話者177話、学習者125話、計302話のナラティブについて、まず、話し始めの部分で語られている内容を観察し、前置きがあったものについてはMaynard（1989）の7つのカテゴリーに「テーマの背景」を加えた8種類に分類した。<sup>2</sup>分類の際、複数のストラテジーが含まれるものはそれぞれのカテゴリーで1件にカウントした。例えば、「ちょっと話変わるけど、さっきの忘れ物の話でね（201313J）」のような例は、「移行要求」と「テーマ告知」に分類した。

次に、各カテゴリーの前置きで語られている具体的な内容及び言語形式について、どのようなパターンがあるか分析し、その結果を踏まえ、日本語教育の現場での指導方法を考察した。

---

1 以下のものは他のナラティブと同条件で比較できないため対象外とした。

- ・話し手と聞き手がはっきりしない会話形式のもの
- ・聞き手の発話が多く独話形式とは呼べないもの
- ・開始前にスピーチのようにタイトルを宣言してから始めているもの
- ・原稿を見ながら話しているもの
- ・描画や写真の説明をしているもの
- ・同一話者が前の話の続きを語っているもの
- ・聞き手の問いかけに答える形で始まっているもの

2 映像の冒頭で「こんにちは」などと挨拶をしているものはその終了後を話し始めとみなした。

## 5. 分析と考察

### 5.1 開始部について

全302話のナラティブについて、開始部を分析し、前置きがあったものについては、その内容を分類したものが以下の表である。

「わたしのちょっと面白い話」の開始部

		母語話者（177話）		学習者（125話）	
		件数	%	件数	%
前置きあり 母語話者80.8% 学習者 80.0%	テーマ告知	57	39.0%	50	43.2%
	テーマの背景	69	32.2%	54	40.0%
	評価／報告価値	25	14.1%	23	18.4%
	聞き手との関連付け	11	6.2%	5	4.0%
	移行要求	4	2.3%	0	0%
	披露許可求め	3	1.7%	0	0%
	テーマの受け入れ	0	0%	0	0%
	情報源の特定	0	0%	0	0%
	その他	4	2.3%	4	3.2%
前置きなし 母語話者19.2% 学習者 20.0%	場面設定	32	18.1%	25	20.0%
	出来事の語り	1	0.6%	0	0%

前置きがあったナラティブは母語話者が80.8%、学習者が80.0%であった。前置きなしのものについては、ほぼ全てが「場面設定」から始まっていた。

前置きなしのものに関しては、本研究で対象としたナラティブは発話権取得の必要がない状況で収録されたものが中心であることが影響している可能性がある。李（1999）でも前置きのないナラティブが観察されたとし、前置きは義務的なものではないとしている。しかし会話中のナラティブについて記述した Maynard（1989）は前置きは必須であると述べているように、前置きはナラティブを導くためのマーカーであり、後に続くナラティブを効果的に語るのに一定の効果を発揮するのではないだろうか。5.2以降で、その内容及び言語形式に触れながら考察していく。

## 5.2 前置きについて

### 5.2.1 前置きの種類

今回は人から聞いた話と他者からの問いかけに答える形で始まっているものは調査対象としなかったため、Maynard (1989) が示した7つのカテゴリーのうち、「情報源の特定」と「テーマの受け入れ」は出現しなかった。また、「移行要求」「披露許可求め」も少数であったが、これは前述のように本研究の対象であるナラティブはいずれも雑談様ではあるが発話権を与えられてから話し始めるスタイルであり、発話権取得の必要性が低いことが要因であると考えられる。尚、「その他」に分類された前置きは、「短編的な話になりますけれど (2011045J)」などメタ言語的表現や、その話をするようになった経緯を語っているものなどである。上記以外のカテゴリーである「テーマの背景」「テーマ告知」「評価／報告価値」「聞き手との関連付け」について、5.2.2以降で詳述する。

### 5.2.2 テーマ告知

母語話者、学習者とも最も多かったのが「テーマ告知」である。

- (5) 「うちのね、父の話なんですけどー」 (2011043J)<sup>3</sup>
- (6) 「あの一、今回、あの、犬のボビーについての話をします」 (2017010F)
- (7) 「えっと、じゃあ私が、大学受験で、日本史受験を諦めて世界史受験にした話をします。」 (2017024J)
- (8) 「はい、今から、え、私が日本語がわからないふりをしていた経験について話します」 (2017022F)

母語話者、学習者いずれも、「〇〇の話」など、一言で表現したものが40件と多く、例(7)、(8)のような結果や要約を述べているものは少数であった。羅(2018)は「わたしのちょっと面白い話」について、最初に概要を言ってしまうと意外性がなくなり話が面白くなる可能性があるため要約的な話は出現しにくいと推測しているが、これを支持する結果となった。

「テーマ告知」という前置きも約4割の学習者がしていることから、「テーマの背景」同様、既知のストラテジーである可能性は高いが、言語形式においてはこれも「テーマの背景」同様、母語話者との違いが見受けられた。母語話者は例(5)のような「〇〇の話」という表現が多く、「〇〇について」という表現は1件もなかったのに対し、学習者は「〇〇についての話／〇〇につい

3 以下、同様の表記は「2011043」は「わたしのちょっと面白い話コンテスト」公式サイト上の各作品のID、「J」は日本語母語話者、「F」は学習者を指す。

て話します」という表現が6件観察された。

### 5.2.3 テーマの背景

母語話者、学習者と次に多かったのが「テーマの背景」である。本稿では、「テーマの背景」を「テーマである出来事に至るまでの状況の描写」と定義する。

- (1) 「あたしのね、主人はね、よく大病をして、もう何回も手術をして、生死さまよってるんですね。」 (2013041J)
- (2) 「あの一すごい、滑舌が、私、悪く、なっててー、それはもう、年のせいかなーとかって、思ってたんですけどー」 (2011056J)
- (3) 「えーと、僕はいつも、まあ、大学の生活が始まってから、多分、あの一、なんか、新しい人と会うと、たびに、ほんとに9割が、僕が女の人だと、思われてます。」 (2018008F)
- (4) 「あー、中国で日本語をならんでた<sup>4</sup>時、おじさん、日本人のおじさんは、『わし』とよく自分で、自分のことを指してる時、『わし』って、い、言いました。」 (2017008F)

例(1)は、不幸話コンテストで優秀賞に選ばれる話、例(2)は若者も言葉をかんでいるのを見て安心する話、例(3)は男性にナンパされる話、例(4)はかわいい系の日本人男子の一人称が「わし」であったことに驚く話の背景として語られている。榊原(2010)が述べているように、いずれもこの前置きがあることによって、「Narrative Event」の主要部分が前景化されていると言えるだろう。背景が語られることで、ナラティブ本体の出来事が際立ち、語られる価値が高まるのではないかと。さらに言えば、例(1)～(4)では、もし背景説明なしでナラティブ本体のみが語られたとしたら、聞き手はその出来事が語られる理由がわからず、面白みが理解できないと思われる。従って、出来事の内容によっては、ナラティブ本体に入る前に背景を語ることが不可欠になってくると言えるだろう。

なお、言語形式については、母語話者が例(1)、(2)のように「～んです」を用いる傾向がある一方、学習者は例(3)、(4)に見るように動詞文、名詞叙述文等を用いる傾向が見られ、三枝(2018)の報告を支持するものとなった。

### 5.2.4 評価／報告価値

「評価／報告価値」について、Maynard(1989)は、Labov(1972)の「評価」と同義であると述べている(p.102)。Labovによれば、「評価」とは、出来事に対する話者の感情や態度が表現され

4 文脈から「ならんでた」は「習っていた」の誤用だと推測される。



る部分である。また Maynard は、Maynard (1989) を自身の著書 (メイナード (1992)) で引用する際には、「Evaluation/reportability」に「物語の価値を主張する。聞きがいのある話であることを主張する。」と訳を当てている (p.31)。つまり、「Evaluation/reportability」には、「出来事に対する感情」と「ナラティブに対する評価」の双方が含まれ、「出来事に対する感情を述べることによって、聞く価値のある話であることを主張する」と解釈できる。以下に例を挙げる。

- (9) 「えーとー、面白い話というより、若干不謹慎な話でもあるんですけども」(2013024J)  
 (10) 「なんかズッコケな感じの話なんですけど」(2015021J)  
 (11) 「あの一、世間ってほんまに狭いなと思ったことがあります」(2012007J)  
 (12) 「今日は私の面白い話について話したいと思います」(2016030F)  
 (13) 「この話は、僕にとって、少し恥ずかしかった、最近の出来事についてです」(2015037F)

母語話者と学習者の使用数に大きな差はなかったが、その内容に違いがあった。「面白い話」「面白いこと」など「面白い」と評価してから始めているものが母語話者は「評価／報告価値」24件中11件 (45.8%) であるのに対し、学習者は23件中16件 (69.5%) に上った。この「面白い」という前置きに関して、母語話者の「わたしのちょっと面白い話」2話を分析した羅 (2018) は、「この話はすごい面白いですよ」といった評価の表現は出現していないことを指摘し、その理由を参加者が「面白い話を語る」という目的を共有しているからだとしたうえで、わざわざ「これから面白い話を言うよ」というような「評価」をする必要はないと述べている。しかし、今回の調査では、「面白い」と前置きしてから始めるケースが多数観察され、特に学習者に顕著であった。学習者に比べ母語話者は、例 (9), (10) のように多様な表現を用いていた。また、例 (11) のように、直接引用を用いて感想を述べている例も2件あったが、これは学習者にはみられなかった。

羅 (2018) はまた、「複数の参加者がいる場合、「ちょっと面白い話」の導入部には「過渡的表現」が要求されるが、「評価」の重要性は低くなる」(p.200) と述べている。しかし、李 (1999) が「出来事発生当時の気持を話す」「物語の価値を主張する」ことを「他の会話参加者の興味を引く」ための前置きだとしているように、ナラティブの冒頭で「評価」を語ることは、聞き手の関心を引き、話に引き込む効果があるのではないだろうか。Labov (1972) は、ナラティブの構成要素の中でも「評価」をとりわけ重要視しており、「評価」があることによって聞き手は話のポイントが理解しやすくなると述べている。また、嶋津 (2004) も同様に、話者が自分の意図を聞き手に伝えるためには経験に対する自分の考えや態度をナラティブに反映させなければならないとし、それによって聞き手は「なぜその話が語られるのか」「語り手が意味しているのは何か」を理解できるとしている。

物語の価値を主張する「評価」はナラティブ中どの位置にも出現可能であり、必ずしも冒頭に

置かれる必要はないが、前置きで評価を述べることは、聞き手を引き付ける有効なストラテジーの一つだと言えるだろう。

### 5.2.5 聞き手との関連付け

Maynard (1989) は、前置きで聞き手に関連することを述べることでナラティブをうまく導くことができるとし、聞き手との共通の友人に言及するという例を紹介しているが、今回の分析対象のように聞き手が知人とは限らない場合、このようなことは不可能である。しかし、以下のような形でナラティブの内容を聞き手に関連付ける例が母語話者で4件、学習者で2件観察された。

(14) 「あたし昔一、よくあのほら、電車乗って、今はないですけどカーラー付けたまんまの人って多くなかったですー？」 (2011006J)

(15) 「えっと、よく日本人は、あ、外国人と会うときには。えっと、がいこじ、外国人はどれだけ日本語話しても、あ、日本人は、えっと、あ、英語で話したい。」 (2017020F)

例 (14), (15) は、聞き手個人ではなく、聞き手を含む全ての人が経験しがちないわゆる「あるある」の事例を提示している例である。実際、例 (14) の前置きの後、聞き手は「ああ、ああ」と同意の相槌を打っており、その後続く同様の事例紹介にも「そうそう」と反応している。このような事例を示すことで、聞き手は共感して話題をより身近なものに感じ、ナラティブに引きつけられるのではないだろうか。

また、以下のように聞き手に問いかけをしている例が母語話者で4件、学習者で2件あった。

(16) 「あの一、えー愛のこもった、熱い、あのお灸のお話をいたします。えっと、お灸は、あの一知ってるよね？」 (2014004J)

(17) 「このビデオで、私の一番のおもしろい、話のことを、話してあげまーす。では、あなたはオーストラリアに行ったことがありますか？」 (2016037F)

例 (16), (17) も聞き手は問われた瞬間自身の知識や経験を振り返るという点で、「聞き手との関連付け」であると言え、ナラティブに引き込むのに有効な手段ではないだろうか。

## 6. 前置きの話し方の指導に向けて

以上、「わたしのちょっと面白い話」のナラティブをデータに用い、前置き表現について検証を行った。5.2.1で述べたように、今回調査対象としたナラティブについては、データの性質上、「情報源の特定」と「テーマの受け入れ」という前置きは出現せず、「移行要求」「披露許可求め」

もごく少数であった。雑談の中でナラティブを披露する際にはこれらの前置きの出現率は高まる可能性があるが、「テーマの背景」「テーマ告知」「評価／報告価値」「聞き手との関連付け」については、よく使われる前置きであると言ってよいだろう。以下、この4種類の前置きについて、日本語教育現場での指導について検討したい。

## 6.2 「テーマ告知」の話し方

面白い話を披露する場合は、前置きでいわゆる「オチ」や概略を言ってしまうと意外性がなくなり面白さが半減するので注意が必要であるが、この点に気をつければ最初にテーマを告知することで聞き手は話の内容をイメージしやすくなり、聞く準備ができると思われる。またこのストラテジーは面白い話以外のナラティブにも有効である。特に日本語能力が十分でない学習者の場合、聞き手の理解を助けるのに効果的な手段になるだろう。

言語形式については、テーマ告知の際、学習者が「〇〇の話」ではなく「〇〇についての話」という表現を用いていた要因として、スピーチなどの前置きについての知識の影響が考えられる。日本語の授業でよく行われるスピーチや発表では、以下のようなものが前置きとして指導される。

「これから、[発表するテーマ]について発表します」 (改訂版日本語中級 J301)

「きょうは私の仕事についてお話ししたいと思います」 (初級からの日本語スピーチ)

学習者は、カジュアルなナラティブについて学習する機会は少なく、知識がないためこのようなスピーチの前置きをそのまま使用したものと思われる。しかしこれは不自然であり、カジュアルなナラティブでは「〇〇の話なんですけど」といった表現を用いるよう指導することが望まれる。

## 6.3 「テーマの背景」の話し方

「テーマの背景」という前置きについて、榊原(2010)は「自らの体験を語る際に効果的であるだけでなく、『いきなり出来事が語られるわけではない』と知っていれば、他人の経験談を聞くときも話の本題や核心をより易しく理解できる」とし、学習者はこのストラテジーを知っておくべきだと述べている。今回の分析では、学習者全体の約4割が「テーマの背景」に言及していることから、ナラティブ本体に入る前にその背景を語ることは汎言語的な行為であり、既にそのストラテジーを身に付けている学者も少なくないと思われるが、指導項目の一つとして挙げ、このストラテジーを使用していない学習者にも意識化させるべきであろう。特に、話の内容によっては聞き手に背景についての知識がないと出来事を語る価値が伝わらない場合があるため、その点に

留意させることも重要である。

言語形式については、「～んです」の使用を促す指導が必要であろう。例(3), (4)のような動詞文は話し始めとしては唐突で不自然な印象を受ける。三枝(2018)は「始発文で『のだ』を使うことは日本語教育で明確には教えられていない」(p.334)と指摘しているが、中には、「～んです」をナラティブの話し始めの表現として提示している教科書もある。例えば、「日本語上級話者への道 きちんと教える技術と表現」には最近の出来事を話す際の切り出しの表現として以下のような例が挙げられている。

「あのう、夕べのことなんですけどね」

「あのね、びっくりすることがあったんですよ」

(日本語上級話者への道 きちんと教える技術と表現)

前者は「setting」後者は「評価／報告価値」であるが、話し始めの表現として例示されている。しかし、特に「～んです」の使用について留意させる指示はない。「～んです」は「テーマの背景」だけでなく、「テーマ告知」「評価／報告価値」にも応用できる言語形式であり、前置きでの使用を明示し、学習者に意識させることが必要であろう。

#### 6.4 「評価／報告価値」の話し方

日常会話の中でも、面白い話を披露する際に「面白い話です」と宣言してから話を始めては、聞き手の期待が高まりかえって面白いと思ってもらえなくなる恐れがあるが、多くの学習者が最初に「面白い話」と言ってしまう。「テーマ告知」同様、ここでもやはり、スピーチの前置きをそのまま流用したことが推測される。学習者は母語話者に比べ語彙が少なく、日本語の教科書に通常登場しない例(9)「不謹慎」、例(10)「ズッコケ」などの語を用いるのは難しいかもしれないが、限られた語彙でも例(13)「恥ずかしかった」のように「面白い」以外の評価はできるはずである。

日本語能力が十分でない学習者がナラティブを語る場合、話の筋は説明できてもいわゆる「オチ」がうまく伝わらず、聞き手はなぜそれが語られたか理解できず反応に窮する場合がある。しかし、最初に例(13)のように「恥ずかしかったこと」と出来事発生当時の気持ちを伝えれば、聞き手はその心境に至る経緯としてストーリーを聞く心構えができ、理解の助けになるのではないだろうか。こうした点で、前置きで「評価／報告価値」を述べるという戦略は、学習者が知っておくべきものの一つだと言えるだろう。

言語形式については、例(11)で母語話者が行っているように、出来事に対する自分の感情を「～と思った」と直接引用の形で述べる方法がある。

学習者が自身のナラティブをどのような表現で評価し、価値づけることができるか、意識化を図ることが必要であろう。

### 6.5 「聞き手との関連付け」の話し方

ナラティブの開始時、まず最初に聞き手に語りかけることは、聞き手を話に引き込む最も直接的な手段であり、学習者も実践しやすいと思われる。ありがちな事例の紹介は、どんな内容でも「よく～ますよね」等決まった表現を用いればよく、質問もテーマに沿っていれば内容は問わない。どちらも学習者にとってさほど難しい技術ではないと思われる。これらは雑談中にナラティブを披露する際の発話権取得にも活用できるものであり、学習者が知っておくべき戦略だと言えるだろう。

## 7. まとめ

本研究では、302話のナラティブの開始部を調査し、観察された前置き表現について分析を行った。その結果から、日本語教育現場でのナラティブ指導において、学習者に提示し得る戦略を検討した。

現在、日本語教育の現場でナラティブの指導が行われる機会は少なく、教材も限られているため、学習者が具体例に触れ、技術を学ぶ機会も少ない。上記のような戦略及び具体例を提示することによって、学習者は何を語ればいいのか具体的にイメージしやすくなるのではないだろうか。戦略指導の際は、新しい文型や語彙を教授することよりも、学習が既存の知識を使って「どう語るか」を意識化させることが重要であると考えられる。

本研究で扱ったデータは、発話権取得の必要性が低い状況下でのナラティブであったが、日常会話の中でナラティブを披露する場合は、必要とされる前置きが異なる可能性があるだろう。これについても今後分析を試み、よりよい指導に生かしていきたい。

## 参考資料

- ・「わたしのちょっと面白い話コンテスト」公式サイト <http://www.speech-data.jp/chotto/> (最終アクセス2020年1月31日)
- ・CEFR Can-do 一覧表 .pdf [https://jfstandard.jp/pdf/CEFR\\_Cando\\_Category\\_list.pdf](https://jfstandard.jp/pdf/CEFR_Cando_Category_list.pdf) (最終アクセス2020年6月29日)

## 参考文献

- ・石沢弘子・新内康子・関正昭・外崎淑子・平高史也・鶴尾能子・土岐哲 (2016) 「改訂版日本語中級 J301 — 中級前期—英語版」スリーエーネットワーク
- ・萩原雅佳子・増田眞佐子・齊藤眞理子・伊藤とく美 (2005) 「日本語上級話者への道 きちと伝える技術と表現」スリーエーネットワーク

- ・加藤陽子 (2003) 「日本語母語話者の体験談の語りについて—談話に現れる事実的な「タラ」「ソシタラ」の機能と使用動機—」『世界の日本語教育』13:57-74 国際交流基金日本語国際センター。
- ・木田真理・小玉安恵 (2001) 「上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析—雑談の場での経験談の談話指導に向けて—」『日本語国際センター紀要』11:31-49. 国際交流基金日本語国際センター。
- ・熊崎早苗 (2006) 「日本語学習者の口頭ナラティブ能力について」『南山言語科学』1:163-182. 南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻
- ・国際交流基金関西国際センター (2004) 「初級からの日本語スピーチ—国・文化・社会についてまとまった話をするために—」凡人社。
- ・三枝令子 (2018) 「わたしのちょっと面白い話」から見た話し始めと話し終わり」定延利之編『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』330-339. ひつじ書房。
- ・嶋津百代 (2004) 「接触場面における異言語話者の日本語のナラティブ分析のための一考察」『大阪大学言語文化学』13:175-18. 大阪大学言語文化学会。
- ・定延利之 (2018) 「限界芸術「面白い話」と音声言語・オラリティ」定延利之編『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』2-33. ひつじ書房。
- ・定延利之・Irina Pourik・奥村朋恵・国村千代・林良子 (2016) 「「面白い話」で世界をつなごう」『2016年日本語教育国際大会パネル発表資料』日本語教育グローバルネットワーク。
- ・榎原芳美 (2010) 「物語の始まりと終わり—笑いのプロは過去の経験をどう語るのか」『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』20:119-132. 関西外国語大学留学生別科。
- ・瀬沼文彰 (2018) 「「ちょっと面白い話」を通して現代社会の「笑いのコミュニケーション」を考える」定延利之編『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』78-108. ひつじ書房
- ・メイナード・K・泉子 (1992) 『会話分析』くろしお出版。
- ・羅希 (2018) 「語りの構造をめぐって—「わたしのちょっと面白い話」から見えてくること」定延利之編『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』184-206. ひつじ書房。
- ・李麗燕 (1999) 「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」—物語を開始するために語り手が使う言語表現を中心に—」『日本語教育』103:59-68日本語教育学会。
- ・Labov, W. (1972). *Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania.
- ・Longacre, Robert and Stephen Levinsohn.(1978) Field analysis of discourse. In Wolfgang Dressler (ed.), *Current trends in textlinguistics*, 103-122. New York: de Gruyter
- ・Maynard, Senko (1989) *Japanese Conversation: Self-Contextualization through Structure and Interactional Management*. Abelex Publishing Corporation
- ・van Dijk,T(1980)*Macrostructures: An interdisciplinary study of structures in discourse, interaction and cognition*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.